

# 関野吉晴：1 アマゾン通い50年、 未完の旅（語る 人生の贈りもの）

朝日新聞 2019.6.18～7.12 （聞き手・山本奈朱香）



武蔵野美術大学を定年退職したが「まだ70歳の気分じゃない。エネルギーが余っている」＝東京都国分寺市、池永牧子撮影

学生時代に初めてアマゾンに行ってから、50年近くになります。何度も通っている集落もあり、アマゾンの先住民族ヤノマミは、行くと「ヨシ、よく来た！」って大騒ぎして歓迎してくれる。

子どもたちは僕が森でおしっこ、大便に行く時までついて来るから、全速力で逃げないといけない。大人も私のハンモックに群がるので、疲れるんです（笑）。帰国する時は「この喧噪（けんそう）から逃れられる」とうれしいのですが、帰国後、懐かしくて、たまらなく会いたくなる。これまで、そんな出会いがたくさんありました。

《南米から東アフリカまで、人類が発祥してから世界に拡散していった道のりを逆向きにたどった旅「グレートジャーニー」で知られる》

旅や探検の醍醐（だいご）味は、「気づき」。自分が普遍的だと思っていることが、実は他の人にとっては特殊なことだと分かる。そうすると物の見方が変わり、自分が変わることがおもしろいんです。

エチオピアでは、ヤギやラクダを飼っている人に「もっと増えたらいいですね」と声をかけたら「いや、これを大切に育てるのが私たちの役目です」と言われた。足るを知る人たちなんですね。いま、「好きな言葉を書いて」と言われると、自戒を込めて「ほどほどに」と書いています。

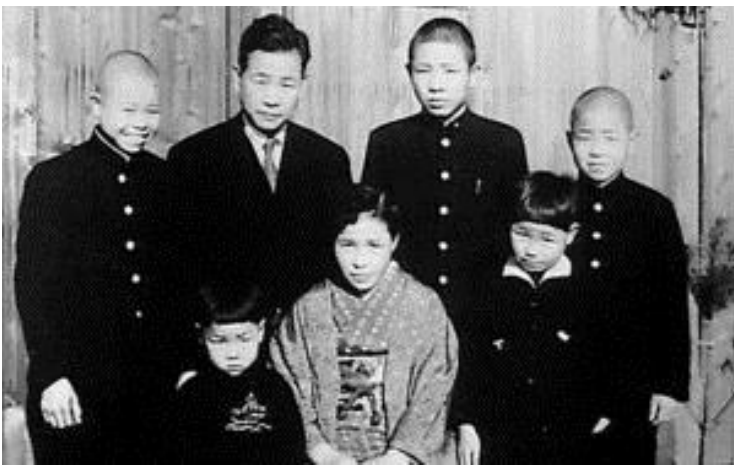
僕は、生きることは自分を作り上げることだと思うんです。そのためには、いろいろなところに行き、いろんな経験を積んだほうがいい、と考えてきた。でもね、人間って、完成し

ないんですよ。僕も、どこかで中途半端に終わって死ぬんだろうけど、次世代が繋（つな）いでいってこれればいいんです。（聞き手・山本奈朱香＝全16回）

\*

せきの・よしはる 1949年1月、東京都墨田区生まれ。93年から足かけ10年かけて「グレートジャーニー」に取り組んだ。99年に植村直己冒険賞を受賞。2002年から武蔵野美術大学で教授（文化人類学）を務め、今年4月から名誉教授。

## 2 渡航自由化「あ、行けるんだ」



4歳のころの関野さん（前列左端）と家族の写真。「末っ子の特権で、どうしたら怒られないかが分かっていた」

男ばかり5人兄弟の末っ子です。親は本当は女の子が欲しかったと思うけど、期待を思い切り裏切って僕が生まれた（笑）。父の名前から1字もらって吉晴と名付けられました。ラッキー・ファイン、おめでたい名前です。小さい頃はふらっと出歩いては、よく迷子になっていました。

出身は東京都墨田区。荒川の沿岸に野球場があって、そこが遊び場でした。小学生時代の夢はプロ野球選手。野球に夢中になって実家の採卵鶏の餌やりを忘れて、よく父親に叱られていました。

教師だった父親は、厳しいというよりうるさかった。僕が何かしようとするたびに「ノー」と言われました。例えば、「1人で山に行く」と言ったら「危ないからやめろ」と。5人のうち戦後に生まれたのは僕だけで、かわいがられすぎというか、かまわれすぎだったんです。

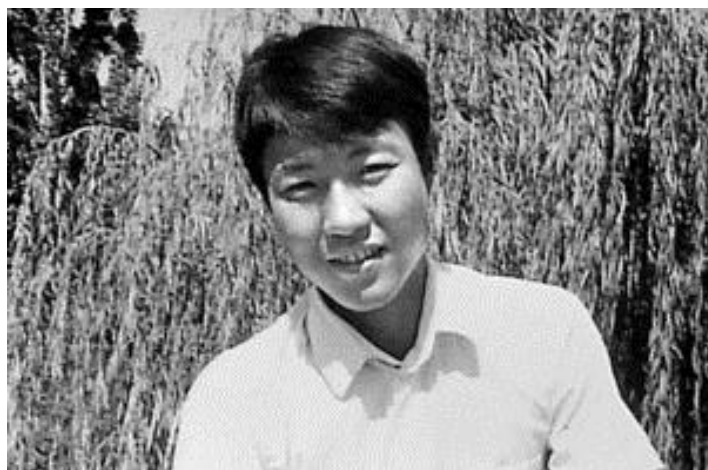
《1964年、都立両国高校へ進学した》

高校1年の時に海外渡航が自由化されて、「あ、行けるんだ」と。小田実さんの世界旅行記『何でも見てやろう』を読んで影響を受けたのもあり、友人と「海外雄飛しようぜ」と言い合っていました。

ラグビー部と柔道部に入り、3年生になってもやっていた。成績が悪くて父が学校に呼ばれたこともあります。父がうるさかったから「大学に入ったら、勘当されてでも好きなことをするぞ」と思っていました。奨学金とアルバイトだけでやるなら文句は言わないだろうと。でも、18歳の時、父が亡くなってしまったんです。親元から離れて京都大学に行きたいと思っていましたが、兄たちも家を出ているので東京に残ったほうがいいかな、と考えるようになり、1浪後、一橋大学に入学しました。

でも文化も自然も全く違うところに行けば、自分がよく見えるし、自分が変わるかもしれないと思ったので、入学後しばらくして探検部を作りました。（聞き手・山本奈朱香）

### 3 失恋こそ大学時代に



奥多摩で。大学時代の関野さん。当時は空手もやっていて「三島由紀夫と組手をやったことがあるんです」

《1968年、一橋大学に入学。5月に探検部を創設した》

模造紙に「探検部員募集！」と書いて構内に掲示したら10人以上が集まり

ました。登山技術を習得するため社会人山岳会に入り、他大学の探検部に話を聞きに行き、活動が盛んな早稲田大探検部の合宿にも参加させてもらいました。年間3分の1ぐらいは登山か川下り、もう3分の1はアルバイト。

いろんなアルバイトをしました。最初は塾の立ち上げ。家庭教師は生徒が1人だけど、塾ならたくさん教えられるから効率が良いと思ったんですよ。集会所を借りて、慶応義塾に対抗して「昭和義塾」と名前を付けて。でも1人では出来なくて友達に手伝ってもらったら赤字になって、1年で閉鎖しました。新聞のセールスもしたけど、契約を1件も取れなくて。

貿易会社のオーナーにブラジルから牛の一枚皮を1万円ぐらいで仕入れてもらい、2万円で売ったりもしました。「次の遠征資金にしたいので」と言うとなん枚も買ってくれる知り合いがいたりして。

《師にも恵まれた》

国際私法が専門のあき場（あきば）準一先生のゼミに入りました。ゼミ生は2人。僕が「あまり法律をやりたくない。文化人類学でアマゾンをやりたいんです」と言ったら、先生は「好きなことをやってもいいけど、やるなら真剣にやれ」と言われました。

あき場先生の「すぐ役に立つものは、すぐ役に立たなくなる。学生時代は本を読み。友達を作れ。酒を飲めるようになれ。それだけやればいい」との言葉に感銘を受けた。後に武蔵野美術大で教えるようになり、学生時代にやっておくといいいこととして「本を読む。友人を作る。恋をする」という言葉を贈ったことがあります。恋というより、失恋しろと言いたい。失恋すると奈落の底に落とされた気分になるけど、勉強になる。失敗って非常に大事なことだと思うんです。失敗すると、必ず反省して真剣に物事を考えるから。（聞き手・山本奈朱香）

## 4 森の集落、孤独を知った夜



仲間と「別々に下って下流で会おう」と別れたが、結局会えずに日本で再会した

僕が生まれた1949年に湯川秀樹さんがノーベル賞を受賞しました。「湯川さんのようになる」という友達もいたけど、僕はやりたいことが何も見つからな

かった。それが、「どこかに行きたい」というのにつながったんだと思う。文化も自然も違うところに自分を放り込んでみたら、目標が見つかるかもしれない、って。

《22歳で一橋大学を1年休学し、アマゾンへ向かう》

アフリカやインドでも良かったけど、アマゾンが一番未知な世界だった。他大学も含む探検部仲間3人でアマゾン全域踏査隊を結成し、アルト・マドレ・デ・ディオス川400キロを下った。「これなら1人でも下れるね」と、次は別々の川を下ることにしました。



ある日、夕方に川から上がろうとしたら、水しぶきが見えたんです。あ、人がいる、と思って近寄ると、子どもたちが水遊びをしていました。僕を見てぴたっと止まり、緊張しているのが分かる。

20歳ぐらいの青年もいたから、「泊めてくれませんか」と聞いたんだけど、スペイン語が通じない。日本語でも一緒だと思って日本語で話しかけたら「しょうがねえな」という顔になり、あごで「ついて来い」と。

家を1軒空けてくれてゴザも敷いてくれたんだけど、彼はさっといなくなっちゃった。手持ちぶさたで、集まっていた女性たちにお土産を渡そうと思ったんだけど、「見ず知らずの人に物をもらうわけにはいかない」という感じでそっぽを向かれた。

狩りや魚取りをしていた男性たちも帰ってきたけど、みんな自分の家に引っ込んだ。壁はないから見えるんだけど、目が合うとそらされちゃう。だんだん暗くなっていく。彼らは炉を囲み、談笑している。それまで、山でテントを張って1人で寝ても寂しいと思ったことはなかった。初めて、みんなと一緒にいる中で1人だけ孤立した時に寂しいんだ、と思ったんです。（聞き手・山本奈朱香）

## 5 仲良くなるには、待たないと



関野さんが所属していた一橋大学探検部の旗を持つアシャニカの子どもたち

《アマゾンで泊めてもらった村で、初めて寂しさを感じた》

気を紛らわせるために、童謡を歌いました。どんぐりころころ、うさぎ追いし、って。そしたら、いつの間にか子どもたちが僕の前に正座しているんです。彼らも正座するんだ、と思っていたら、そのうち子ども

たちも歌い始めた。お礼に歌を歌ってくれているんだと思ったら、どうも様子が違う。「めだかの……」って、僕の歌をまねしているんです。

いつの間にか、子どもたちの後ろに大人も座っている。お土産を渡そうとした時は断ったおばあちゃんが、ヒョウタンから巻き貝を「お食べ」って出してくれて、みんなニコニコして見ている。

食べ終わって寝ようと思ったら、子どもたちに歌を催促されて、また歌いました。お土産をあげることによってではなく、音楽という世界共通の文化で、ぐっと距離が近寄った感じがして、すごくうれしかった。

翌日はお別れしましたが、旅の間はそんな出会いと別れの繰り返しでした。1日で仲良くなれることもあれば、1週間かけても駄目な時もある。でも、1年間の経験を通して、時間をかければ誰とでも仲良くなれるぞ、という感触を得たんです。そのためには待たなきゃいけない。だから僕はいま、誰よりも待てます。

《先住民族アシャニンカのもとで3カ月間の居候生活も送った》

小屋を1軒贈ってもらって、サルやイノシシを捕って食べていました。暇すぎて「1キロの米は何粒だろう」って数えたこともあったほど。最後に裸足で太鼓と弓矢を持って歩いていたら、別の部族から「何族？」と聞かれました。「アシャニンカ」と言ったら「あ、そう」って誰も疑わない。

アマゾンの先住民族は、日本人とよく似ているんです。その頃から「この人たちは一体どこから来たんだろう」と思うようになり、後の「グレートジャーニー」の旅につながりました。（聞き手・山本奈朱香）

\*

## 6 「トウチャン」一家と付き合って



マチゲンガの人たちと。「彼らとの付き合いが一番長いし、一番影響を受けている」=1977年

《1972年に帰国したが、翌年、再びアマゾンへ》

初めて行ったアマゾンで出会った人たちは、少なからず文明に

接したことがありました。「アマゾンにはもう未知な地域はないのでは」と目標を失っていたところ、奥地に文明化を嫌う先住民たちがひっそりと暮らしている場所があるとの資料を読み、そこへ行き、その人たちと暮らしてみたいと思ったんです。

マチゲンガは5千人いると言われていますがそこでは200人ほどが孤立して住んでいるらしい。標高千メートルぐらいの山頂に住んでいるのですが、気づかれないよう人目につく場所の木は切らず、川原でも足跡が残らないよう石伝いに歩くので、探すのが難しい。

最初に会った時は真っ青になって森の中に逃げていきましたが、2度目に行ったときは3カ月同居させてもらい、狩りや魚取りに行っって仲良くなりました。

特に親しくなったのは2家族17人。「名前を付けてほしい」と言われ、両親はトウチャン、カアチャン、のんびり屋の五男はソロソロ……と思いつきで付けました。すぐに忘れてしまうだろうと思っていたのですが、次に会った時もその名前で呼び合っていました。両親は亡くなりましたが、一家とは40年以上、5世代にわたる付き合いが続いています。

《彼らと付き合う中で、先住民族に対する見方が変わった》

日本でマチゲンガの話をする、よく「彼らは何を楽しみに生きているんですか」と聞かれるので、同じ質問を返すんです。急には答えられない人が多く、しばらく考えて、「家族が仲良くて元気で、仕事がうまくいって、カラオケで歌ったり本を読んだり」と返ってくる。アマゾンにはカラオケはないけど、歌も楽器も踊りもあり、小説はないけど神話、民話がある。仕事＝狩猟、魚取りがうまくいけばうれしい。最初は違いが目につきますが、付き合ってみると、根本的には一緒だと気づきました。（聞き手・山本奈朱香）

## 7 先住民族の地図、森と川の世界



焼き畑の作業を終えたマチゲンガのトウチャンと。出会いから10年たち、洋服を身につけるようになっていた＝1982年

《先住民族とは「地図が違う」という》

私たちの地図は、海、山、砂漠など多様です。マチゲンガは海を見たことがないだけでなく、存在も知りません。彼らの地図

は森と川だけでできているんです。私に「どこの川から来たの」と聞くので、「タマガワ」と言うと、「聞いたことないなあ。魚や鳥はいるの？」って尋ねられるんです。僕は「魚も鳥もいるけど、ここほどは豊かじゃない」と答えます。



来るのにどれぐらいかかるかも聞かれるんですが、東京からペルーの首都リマへ、そこからバスでアンデスを越えて舟に乗り、最後は歩いて……。早くて1週間、雨で増水すると2週間。彼らの言葉では「3」までしかないので月の満ち欠けで「新月から数えて満月の前ぐらいかな」と言うと、「隣の川と同じぐらいじゃないか。獲物も魚も少ないなら、家族でこっちに来たら？」と言われます。

### 《一緒に旅もした》

彼らは出無精なんだけど、僕がしつこく頼むと、みんなついて来ます。でも彼らは荷物を持って歩くのが大嫌い。昼前には「足が痛い」「疲れた」と言い出す。僕は夕方まで歩きたいから「遠くから来ているんだから」と泣き落とそうとしても、「隣の川と一緒にぐらいだろ」とか言われて（笑）。

午後2時か3時ごろ、妥協して「ここで休もう」と言うと、その辺の植物を使って30分ぐらいで小屋を作り、喜々として狩猟に出かけます。狩猟は苦痛ではないのです。いまを楽しんでいるという点では、彼らにかないません。

日本では電気、水道、ガス……と管につながれて暮らしていて、1本切れるとパニックになるけど、彼らは何にもつながれていない。自然の一部となって生きている。そうすると、自然への畏敬（いけい）の念や感謝が生まれます。目に見えない何かがあり、それを怖（おそ）れながら生きていく。そのほうが人は謙虚になり、自然をコントロールしようなどとは思いません。（聞き手・山本奈朱香）

## 8 居候先で役立つため、外科医に



*研修医時代。「人はなぜ心を病むのか、文化に関係があるのだろうか、といったことに興味があった」*

《1975年、一橋大法学部を卒業し、社会学部に編入。だが、さらに別の大学へ進むことに》

その頃、探検家になりたいけど「探検家」という仕事はないのでどうしようかと考えていました。ジャーナリストか写真家か研究者か……。でも、アマゾンで出会ってきた人たちとは調査や研究としてではなく、友達付き合いを続けたかった。そう考えた時に「医者」というのが浮かんだんです。



僕の旅は定住型。「何でもするから、泊めてください。同じものを食べさせてください」と言っていたけれど、何でもするからと言っても、足手まといになる。医師になれば少しは役に立つのではと思って、翌年、横浜市立大の医学部へ。精神医学にも関心があったんだけど、どこに行っても最低限何でも診られるということで、外科医になりました。

ただ、ひとつ不安があったんです。僕が治療をすることで、シャーマンなどの伝統医からライバル視されたら困るな、と。僕の治療のほう効いてしまったら、その文化を壊してしまう恐れもあるから。

でも、医師になってから初めてアマゾンの奥地に住むヤノマミのところに行ったら、最初の患者がシャーマンだった。「頭が痛い」と言うんだけど、毎日幻覚剤を吸っているから（笑）。「少し減らしたら？」と。

《後に結婚する玲子さんとの出会いもあった》

彼女は津田塾大の探検部のキャプテンで、熱気球を設計し、縫い、飛行していました。数学科の学生だったので、医学部を受験する時、「家庭教師をしてくれない？」と頼みました。結婚したのは医学部を終えた33歳の時。ペルーのマチュピチュにある「月の神殿」で結婚式を挙げました。その後、アマゾンやパタゴニア、ギアナ高地なども一緒に行きました。

妻とボリビアを旅していた時に、「グレートジャーニー」の旅に出ようという気持ちが膨らんでいきました。（聞き手・山本奈朱香）

## 9 太古の人類たどる、44歳の出発



マゼラン海峡を渡ろうとしたが荒天となり、着岸した。その時岩礁にあたりカヤック前部にひびが入った

アマゾンで出会う人たちは、顔立ちが日本人によく似ています。僕は通い続けるうちに「この人たちは、いつごろ、どこから、なぜやって来たのだろう」という思いが募り、人類が世界中

に拡散した道のりをたどってみたいという気持ちが強くなっていきました。

《人類はアフリカで誕生し、その後パタゴニアまで拡散していったとされる》

英国の考古学者が「グレートジャーニー」と名付けたこのルートを、徒歩や自転車、カヌーなど、自分の脚力と腕力だけで逆向きにたどりたいたいと思いました。

40歳を過ぎていましたが、その頃に井上ひさしさんが、伊能忠敬の生涯を描いた『四千万歩の男』を出していました。伊能が全国を測量し始めたのは56歳でした。それを思えば40歳なんてガキンチョ。それに、時間さえかければ出来ると思ったんです。30年かかってもいいと思っていた。

妻には、出発の4年前に話しました。「おもしろいわね」と言うと思っていたら、黙り込んだ。15分ほど沈黙が続き、最終的に返ってきた言葉は「バカな人だとは思っていたけれど、それほどバカだとは思わなかった」。あきれて声が出なかったみたい。でも、最後には「こういう男が世の中に1人ぐらいいてもいいか」という感じを出してくれました。

《1993年、勤めていた病院を退職。44歳で旅に出た》

南米大陸最南端よりさらに南の島からシーカヤックで旅を始めました。パタゴニアでは、北西から強烈な風が吹いているんです。風が止まる瞬間には、風に負けないように傾けている体がずっこけちゃうほど。ベーリング海峡でもそうでしたが、良い風は北または西から吹いていた。太古の人たちは風に押されて移動してきたんだというのが分かりました。（聞き手・山本奈朱香）

## 10 我々は何者？問いながら進む



2001年、紅海のアカバ湾を特別許可を得てカヌーで横断。強風で2回失敗した後にエジプトに上陸した＝関野さん提供

《グレートジャーニーは人力だけで進む旅だった》

徒歩や自転車など自分の脚力と、カヤックやカヌーなどの腕力、そ

して自分で操作できる犬やトナカイ、馬やラクダだけを使いました。最高気温50度、最低気温マイナス50度の中、太古の人が感じた暑さや寒さ、雨や雪、ほこり、においを体で感じ、彼らに思いをはせたいと思ったのです。

旅をしながら「我々はどこから来たのか」とともに「我々は何者なのか」と考え続けました。他の動物とどこが違うんだろう、と。

牙もなくて爪も鋭くなくて、皮膚も薄く、敏捷（びんしょう）性も劣る。こんなに弱い人間がなぜ生きてこられたのかが不思議でしょうがなかったんです。でも、四つ足の動物から見たら、二本足で立つ人間が大家族やコミュニティーを作り、集団でいると、大きく見えて、その上こん棒でも持っているとなぐりにくいんじゃないか。だから弱いながらも生きてきたのだと思うようになりました。

旅が予定通りにいったことはありません。ベーリング海峡は凍結期に歩いて渡ろうとして失敗、エスキモーの皮舟もダメで、最後はシーカヤックで挑戦したけどなかなか渡れなくて。でも、今年はダメでも来年がある。死ななければ何回でもやればいい、と思っていた。そして待っていると、無風快晴で渡れる日がやってきました。

《1年のうち約10カ月を旅しては一時帰国する生活を続けた》

1995年の一時帰国中に阪神淡路大震災が起きました。ボランティアで神戸に行き、小学校の体育館で2週間ほど診療しました。周囲に旅のことは伝えていなかったのですが、東京に戻ってしばらくしてからグレートジャーニーのテレビ番組が放映されたんです。そして被災者やスタッフから「勇気づけられた」という電話がたくさんかかってきて、すごくうれしかった。誰かを喜ばせるためにやっているわけではないけれど、人を元気づけることがあるんだ、って。（聞き手・山本奈朱香）

## 11 こびない7歳、「かっこいいな」



プージェー（左）といとこのバーサ。プージェーは2004年に交通事故で亡くなり、関野さんは四十九日の法要に参加した＝1999年、関野さん撮影

《グレートジャーニーの旅では、出会いにもこだわった》

よく旅を布にたとえるのですが、移動を縦糸とすれば、寄り道して人と出会う横糸もなければ布にはならない。僕は横糸のほうが好きなんだけど、道草ばかり食っていると進まなくて、南米を出るまで2年かかりました（笑）。

モンゴルでは遊牧民のゲルに泊ってみたいと思い、滞在できる村を自転車で探していた時に、プージェーという7歳の女の子と出会いました。草原



で馬に乗って牛追いをしている姿を撮ろうとして邪魔してしまい、大声で叱られた。一切こびることがなくて、カッコいいなあって。彼女とは5年にわたって交流し、ドキュメンタリー映画になりました。

1人の子どもがいれば、友達や先生がいて、子どもの親がいて、親の仕事仲間がいて、と広がっていきます。それに、子どもと遊んでいるとおもしろい。出会った子どもたちの写真集も作りました。

《写真集は他にも出している》

1971年に最初にアマゾンに行く前に、朝日新聞の出版写真部長を務めた秋元啓一さんからレクチャーを受けました。開高健さんと一緒にベトナムに行った方です。覚えているのは二つ。「驚いたり感動したりした時に、感動していないでシャッターを押せ」、それと「撮ろうと思った距離から一歩前に踏み出せ」でした。

写真は、記録として残しておきたいと思って撮ってきました。ただ、絵を描いていると人が寄ってくるけど、写真を撮ろうとすると逃げていく。常に壁になるから、僕がもし絵を描けていたら、写真は撮っていなかったと思います。

当時は28ミリレンズしか使いませんでした。会話ができる距離まで思い切り近寄らないと撮れない。アンデスでは、3年通って関係性ができ、ようやく撮れるようになった村もあります。断髪儀礼に参加して擬制の家族になると、笑ったことが無かったお母さんの表情が解けていくように笑ってくれました。（聞き手・山本奈朱香）

## 12 10年かけゴール、達成感よりも



タンザニアのラエトリにゴールする  
前日、サバンナを特別許可を得て自  
転車で走った＝2002年2月9日、  
中田徹撮影

《グレートジャーニーの旅では、  
事故や危険な目にも遭った》

パナマでは自転車で走っている時  
に襲ってきた犬と衝突して転び、鼠



径（そけい）ヘルニアになりました。外科医としては週に2～3例は手術するけど、自分になるとは思っていなかった。打撲と深い擦過傷もあったのですが、自転車でメキシコまで旅を続け、1カ月ほどして手術のため一時帰国しました。

一番危険を感じたのは自然の猛威より治安の悪さ。コロンビアやベネズエラではピストルを正面から突きつけられた。戦闘や虐殺が頻発していたコロンビアとパナマ国境のダリエン地峡は時期をずらし、レンジャーと行動しました。

場所によっては「今回は死ぬかもしれない」と恐怖を覚えた時もありました。でも「つらくてやめたい」と思ったことはなかった。飢餓、貧困、差別などでもっとつらい思いをしている人はたくさんいます。冷戦時代と9・11後の「テロとの戦い」のはざまの、やや平和が続いた時代だから、また経済的に豊かな国に生まれたからできた。ぜいたくな旅をしているという思いがありました。

### 《2002年、足かけ10年の旅を終えた》

ゴールした時に、一番大切なものは当たり前なことだな、と思いました。大地も水も空気も、きれいなのが当たり前。家族と一緒にいられるとか、好きなことが言えて、好きなところに住めることも当たり前です。でも、世界にはそれが脅かされている人があまりにも多い。当たり前のことは貴重なことで、自分で守らなきゃいけないんだ、と。

グレートジャーニーは40以上のミニエクスペディション(探検)のつながりだったので、ミニゴールに到達しても、また次があった。すべて終えた時は達成感というより、「やれやれ、次はないんだ」という感じでした。

でも、実はすでに次の計画が頭の中でぐるぐるまわっていた。今度は足元に目を向けてみようと考えていました。（聞き手・山本奈朱香）

## 13 ーから作ったカヌーで海路へ



現地の船大工は設計図も引かず、頭の中にカヌーを描き出す。棟梁（とうりょう）の指示に従って作業する関野さん（左）と卒業生

《2002年4月、武蔵野美術大教授（文化人類学）に》

声がかかった時は戸惑いました。他人に教えるなんて、考えたことがなかったので。でも、「自分で歩いて、見て聞いて考えてきたことを、自分の言葉で語ってくれたらいいから」と言われ、それならできるかな、と思いました。

教員をしながら「新グレートジャーニー」の旅も始めました。人類が世界に拡散していった道のりをたどったので、今度は日本列島に人類が移動したと思われるルートを旅しようと。形質人類学や分子人類学、考古学などから考えられるルートのうち、シベリアから北海道に至る「北方」、ヒマラヤから朝鮮半島を経て九州に至る「中央」、インドネシアから沖縄に至る「海上」の三つを選びました。

最後の海上ルートでは、自然素材からカヌーを作ることになりました。一から作れば気づきがあるだろうな、と思ったんです。僕だけが気づくのはもったいないから、学生にも声をかけたら200人ぐらい集まりました。

海岸で砂鉄を150キロ集めるところから始めて、鍛冶（かじ）職人の協力を得ておのやなたを作った。インドネシアに行って54メートルの大木を切り、丸木舟「縄文号」を作りました。学生2人と現地のマンダール人漁師とで星と島影を頼りに航海し、2回の中断を挟んで3年目にゴール。学生や卒業生が撮影・編集した映画もできました。

《「答えは一つではなく、安易に答えを教えない」という》

一からやると時間もお金もかかるけど、徹底的に調べるし、いろんな気づきがあります。僕は、これからの時代は試験で知識を問われることはなくなり、問題解決能力が大切になっていくと思う。自分で問いをたて、自分で解けるようになることがベスト。そんな思いで教員をしていました。（聞き手・山本奈朱香）

## 14 皮なめし工場で、足元を知る



革をつるして大きな乾燥機で乾かす＝  
関野さん撮影

《2003年、54歳で豚皮のなめし  
工場での体験労働を始めた》

長く海外を旅してきて、自分の足元について知らないと感じました。僕が生まれ育った東京都墨田区には皮なめし

の工場があります。今までと同じように、まずは一緒に仕事をして、職人たちと仲良くなったら話を聞こうと思いました。

湿った皮は1枚8キロぐらい。それを何百枚とドラムに入れては出す。重労働です。劇薬も使うため、ゴム手袋の上に軍手をはめて作業するから、自由もきかない。手袋なしでやろうと思ったら、先輩に「指紋がなくなる」と言われました。危険な仕事場です。

日本の高度成長はこの人たちが支えていたんだな、と感じました。皮を革にしていけますが、職人技で、仕事に誇りを持っている。でも、職人さんは高齢化しています。従業員22人中11人が外国人でした。産業の空洞化、差別の問題もあり、東京では普段は見慣れない光景ですが、日本の縮図でもあります。

《グレートジャーニーについて、いまは異なる思いを抱く》

旅を始める前は、人類が世界中に拡散したモチベーションは好奇心や向上心では、と思っていました。一番遠くへ行った人は最も好奇心の強い人ではないかと考えていたのです。

でも、一番遠いチリのナバリノー島は狩りの獲物もない。純粋なヤマナは90代の女性1人だけになり滅亡寸前です。

人口が増えて弱い人が押し出されたのではないかと考えるようになりました。本当に弱い人は滅びたが、押し出された中でもフロンティアでパイオニアになったグループが、そこを「住めば都」にしていったのではないかと。今は、グレートジャーニーという名前は間違っていて「グレートイミグレーション（移民）」なのでは、と考えています。その流れはいまも続いている。工場で働く外国人を見ていると、そんなことを感じました。（聞き手・山本奈朱香）

## 15 妻はかみさんならぬ「カミサマ」



日本に来た人たちがたどった道を旅する「新グレートジャーニー」で、木を切り倒して作ったカヌー「縄文号」に乗る関野さん（中央）

《身長166センチ、体重66キロ。最近少し背が縮んだ》



初対面の人からは「もっと熊みたいな人かと思っていた」と言われます。僕は人並み外れた体格や体力があるわけではないし、語学力や知識が並外れているわけでもない。それでも50年近く続けてこられたのは何かというと、時間だと思います。能力は人によって違うけど、時間は平等にあるから。

「怒ったことがないでしょう」と言われることがあるんですが、僕も国境通過など様々な許可が出ない時とかはイライラしますよ。でも、待てばいつかは、って考えるんです。僕、そういうことに関しては粘り強いから（笑）。

時間に対する感覚は、アマゾンの人たちの影響だと思います。マチゲングアの人たちは、時にはしたただけで、ゆったりとつつましく、優しい。狩猟民なので、成果はその日に出るから、今を大切に生きるし、物を蓄えないから人のつながりが大事。一方、都会では物を蓄えて将来に備えるけど、長寿社会ではどれだけ蓄えたらいいかわからず不安が増すのでしょう。異なった見方、考え方をする人の智恵、知識、発想で、文明の負の側面を解決するヒントがたくさんあると思う。

#### 《彼らの子育ても独特だった》

手取り足取り教えないし叱らない。森や川で痛い目にあって成長していく。自然が子どもたちの先生なんです。10歳になると1人で森に入り、獲物を捕ってきます。

僕の子育てですか？ 叱らないというより、叱れなかった。たまに帰ってくるだけだし、お互いに照れちゃって。僕は、父親としての役割を果たしてこなかった。娘は小さい頃、妻から「お父さんに一緒に旅に連れていってもらうから」と叱られると、言うことを聞いていました。グレートジャーニーの旅をしていた時、安全な時はペルーや中米、北米やネパール、ケニアに妻と娘を呼んで旅をしました。最近は、妻を「かみさん」ならぬ「カミサマ」と呼んでいます。（聞き手・山本奈朱香）

## 16 地球永住計画、歩いて考える

旅も続けたい。体力維持のため毎日1万歩ほど歩いている＝東京都国分寺市、池永牧子撮影

#### 《2015年、「地球永住計画」を始めた》

「火星移住計画」はもはやSFの世界ではなくなりつつあります。しかし、火星移住のための調査研究で分かってきたことは、この地球が命を育むのにいかに奇跡的な星かということ。地球の生態系を良い状態で孫やひ孫の世代に繋（つな）ぐにはどうしたらいいかを考えるのが、地球永住計画です。



東日本大震災が起きて、日本人が生産至上主義の路線から変わる転機になると思いましたが、変わらなかった。まずは足元にあった東京の玉川上水に着目しました。



アマゾンに比べると小さな自然ですが、草木が繁茂し、虫や鳥が飛び、動物たちが動き回っている。高槻成紀先生（保全生態学）から、大した器具がなくても生き物たちの繋がりを調べられると聞いて熱くなり、指導を受けながらタヌキと糞虫（ふんちゅう）を中心に、仲間と調べ始めて3年半になります。

タヌキが草木の実を食べれば糞の中に種が残り、いつか芽を出し、群落ができます。そこに虫や動物もやって来て、その土地特有のバランスの取れた生態系ができる。タヌキや虫の視点で文明社会を見ると、バランスを崩しているのは人間。辺境の伝統社会では人間もこの生態系にうまく組み込まれていました。

宇宙やDNA、生き物の進化など自分たちでは調べられないこともあるので、専門家を招く公開講座も月に4回ほど開いています。

《アンデスの先住民に伝わる、好きな民話がある》

「ハチドリのひとしずく」という話です。山火事が起きて他の動物が逃げる中、ハチドリは小さなくちばしで水を落として消火しようとする。バカにされるんだけど「僕は、僕ができることを一生懸命やっているんだ」と言う。それが他の動物の心を動かすんです。私も、身の丈に合った活動を続けていきたいと思っています。

＝おわり